

## 新刊 紹介

For some in ancient books delight;  
Others prefer what moderns write:  
Now I should be extremely loth  
Not to be though expert in both.

岡本昌夫(女子大学教授)著「想像力説の研究」東京南雲堂、A5判二七二ページ、定価二二〇円。

芸術創造の原動力を Imagination (想像力)に求め、その性質について言及したものは、古くはギリシャの哲学者 Aristotle や Philostratus がいるが、イギリスにおいては、Imagination に関する思想は Renaissance 以後徐々に発達したと考えられる。岡本教授は「すべて普遍妥当な知識を得るためには、史的にその由来をたずね、その発展をおとつけると共に、それを綜合統一してその真髄を見抜かねばならない」との信念のもとに想像力思想発展のあとを歴史

的にたどっておられる。

第一篇「想像力説以前」においては、十六世紀から十八世紀におけるイギリス文芸批評が、Aristotle の模倣説を誤って解釈することによって、模倣即芸術と考へ、個性を重んじ、独創を尊ぶ想像力に思いを致すことになかった点を詳述すると共に、その間にあって若干の慧眼な批評家が想像力の意味に目覚め Imagination に関心をもちはじめた事情が論じられている。第二篇想像力説の確立者コールリッジの思想と「想像説」では、想像力説の確立者 S. T. Coleridge の精神形成とその想像力説の評價が論じられているが、特に Coleridge が Plinius などの Neo-Platonists やイギリスの経験論哲学、ドイツの観念論哲学などへレニズムに由来する哲学の教養を身につけ、殊に Kant 哲学の影響を顕著に示しながらも、なお聖書に基づくヘブライズムの思想を深く内蔵していた点を明らかにすることに重点が置かれている。第三篇「想像力説の受容と継承」には、Coleridge によって確立された想像力説が彼と同時代の詩人、批評家すなわち Wordsworth,

Lamb, Keats, Hazlitt, Hunt などによって支持され、敷衍されたばかりでなく、次の時代においても Ruskin や Peter によって受け継がれた経緯が述べられ、第三篇「現代における想像力説」では、二十世紀に入り、Coleridge 死後百年を数える頃から Coleridge 研究は新段階を迎え、彼の想像力説の評価は一段と高まり、多くの学者、批評家が Coleridge の想像力説を取り上げ、新しい解釈を加えることになった事情が詳述されている。これによって Hulme や T. S. Eliot は古典主義の立場から、想像力説を肯定し難い事情にあったにもかかわらず Coleridge を極めて高く評価し、彼を Dryden 以上の批評家とみなしていることや、積極的に Coleridge の想像力説を肯定し、それに新しい光をあてて解釈しようとした Sir Herbert Read, I. A. Richards, Stephen Spender などにについて知ることが出来る。

以上によってほぼ明らかのように、本書はイギリス文芸批評における想像力思想の系譜を明らかにし十九世紀初頭 Coleridge によって確立された想像力説が今日なお力

強くイギリス批評界に存在していることを明らかにしている。想像力に関する研究は現代英米両国の学界においてかなり盛んで一九三〇年以後だけでは J. L. Lowes, I. A. Richards, D. G. James, Sir Herbert Read, J. V. Baker などの研究を挙げることが出来るが、いずれも Coleridge の想像力説のみを取り上げた平面的な研究であり史的な展望に乏しいといえる。その意味において、想像力を史的に取り上げ、その成立と展開を詳論した本書は、他に例を見ない劃期的な研究の成果であり、批評の根本問題である想像力の問題を史的に展望したことは、文芸批評の諸問題を総合的に理解するよすがとなるものであり、一般的文芸批評の態度の問題にも重要な暗示を与えるものである。(岡野)

笠原芳光著(大学宗教主事)「純粹とユーモア」東京教文館、B6判二四三ページ、定価四八〇円。

あとがきに「この本はここ十年ほどの間に雑誌に発表してきたものなから、広い意味で人間論とみなしうる文章を集めた

もの」とある。全体は三部にわけられ、第一部には一般的なものが集められているがなかでも「儀式なき生活」「私の実存主義」「深夜通信」「赤岩栄の死」の四編では著者自身の精神史から説きおこされている。第二部は「権名麟三への疑問」「遠藤周作への疑問」をはじめ、文学の領域で語られる。ことに「地下水の思想」はイエスの意味を大胆に語る傑作といえよう。第三部は映画評の形のものである。全部で二二編の洞察力にとんだ評論集である。

著者の評論半径はじつにひろく、文学や哲学にたいする造詣はふかい。しかしその広範な視野のなかで著者がねらいを定めている標的は現代日本のキリスト教にはかならない。ここに集められた評論はすべて人間論ないしは人生論といつてもよいが、しかしむしろキリスト教への提言、批判の書というべきであろう。

イエス以後のキリスト教は、教会がつくりだした理念によって彩色されて、定型化し、いまや客観主義、神話性、観念論に墮しているが、イエスその人のもとにあった原初の集団は不定型なもので、そこには人

間を動かし生かす力があつた、というのが著者の立論であり、これを実存と本質の逆倒として説明する。このようなイエスの現実性に肉迫しようとする志向は全編をつらぬいている。

ここにはまた、著者の根本的な人間観がみられるが、それは人間を、生きた人間として把握しようというもので、純粹からユーモアへの移行を説く、冒頭の「新しい人間の問題」で集中的に展開されている。

このエッセイを読んでも、社会的な問題意識が濃厚であるが、著者の本領はやはり如上の人間論にあり、これに立脚して現代のキリスト教界をその内側から批判する。

キリスト教の根本塞源をめざす書である。といつても、主張するところは新しいキリスト教の形成というよりもむしろ「宗教は宗教でなくなることによって、はじめて真の宗教となる」と唱道するマルティン・バーの傾向と軌を一にするものがある。

人間とはなにか。これがたえず著者の念頭にあつた問いであろう。この問いをこんご徹底的に追究されること期待する。(工藤)